



なぜ「街づくり」なのか

全国各地、街（まち）づくりが盛んである。私は、街づくりを特別なものと考えずに「生活の延長あるいはそのもの」ととらえているので、街づくりは自然体であるべきとの思いをここに展開いたします。「滑川の街づくり」の一助になれば幸いです。

はじめに、なぜ街づくりかを考えたい。いま、家族や地域コミュニティの崩壊が取りざたされ、個が埋没しがちであり、人間的な関わりがややしくなろうとしている。こうした状況だからこそ、我らの生活を如何に豊かに幸せに営んでいくのか、抜本的な対応として実は街づくりがある。

そもそも街とは、生活を営む場である。人は街をつくり、街は人をつくる。しかも、街には過去から未来までの住む人の場となり、これを自然という環境が支えている。これより、街にはそうした方々の想いが記憶としてあるいは有形無形の文化として底流を形成している。自然や生命を大事にするという考えは、街という人間の生活空間にも生命が宿るかのごとく大事なものであり、人間の関係性とか、個の尊重といったことがおのずと必要となることがわかる。そしてまた、街の時間的な特性として、古さについては文化財の保護として人間生活の記憶と記録を尊重することになり、逆に新しさの創造についてもそうした範疇で語られるものである。また、自然の畏敬についても、自然を大事にしていく姿勢も当然ということができる。

以上のように考えて、街づくりの本質を日常生活の健全さの醸成にあるとして、これには以下の項目を挙げることができる。

(1) 人が街に住むこと、居座ること。：生活の匂いが街いっぱい漂うように。

(2) 歩ける街に。：街を歩くスピードで町が息遣いしていることを満喫したいものである。健康のための街のために歩くのである。

(3) とともに汗水たらす。：皆さんで支える町というものをなんとか意識化したいものである。

(4) 自分たちの生活が街を遊離させない。：無関心ということは街づくり以前の問題であり、皆さんの生活がそのまま街となって形になっていることに認識を深めたいものである。

まとめとして、思い入れが形になり、人間関係の煩わしさが普通の営みの中で面白さに転嫁していくといった土壌があれば、どんな営みでも、その地域において光り輝くものとなるはずである。

前・富山建築・デザイン専門学校
教授・工学博士 富樫 豊

「全国町並みゼミ飛騨市大会に参加して」

＜町並みゼミ飛騨市大会＞



9月30日から10月2日にかけて飛騨市古川にて「第34回全国町並みゼミ飛騨市大会」が開催され、当会より金山副会長と小森幹事、事務局長の三名で参加した。

初日12時受付後13時より開会式、基調講演、開催地の報告、各地の報告を聴き、夕刻滑川に帰った。翌日の早朝に再び古川へ赴き、6つの分科会

の内「町並みを作る祭り文化」に参加した。分科会は現地見学と討議が行われ、前日同様夕方帰途に着いた。今回は申し込みが遅かったため宿が取れず、文化公演会や交流会、夜なべ談義に参加することは出来なかった。

受付を済ませたところ、入り口には見た事のある人物がいた。「NPO法人歴町センター大聖寺」の瀬戸氏だった。実はこの大会の前の週、加賀市大聖寺を視察した際に、大聖寺のまちづくりを熱く語って下さった方である。「住民が金を出し、口を出し、そして汗も出す。」という言葉は特に印象に残った。

基調講演は株式会社日本政策投資銀行の藻谷氏によるもので、「土地本位制から町並み本位制へー人口成熟下を生きる我々が次代に遺すものー」と題され、人口減、現役世代の激減に伴い土地神話が崩れ去り、町並みの価値がこれからいかに見直されるかというものであった。さらに、古い町並みを修復し、維持、活用していくことで地元の産業が活性化し、交流人口増加にもつながるとも・・・。

また、古き良き建物は材料が吟味され、造作も細部にまで凝り、全てに於いて上質である。そこでは良い家具を使い、良い生活が営まれ、良い文化が育つ。結果的に住みたくなる町並みが形成され、建物は高額で取引されるようになるという事らしい。そういった価値観が育つには10から20年はかかるだろうと締められた。



瓦二枚の軒を持つ店

データ、図解、言葉どれも大変説得力があり、あつという間に1時間余りの講演が終わった。

町並みの保存と活用の活動は豊かな暮らしを持続的営むことを目指し、地域に住む格好よさを追い求める事であり、10年、20年後に再び滑川宿が光り輝く夢を描き、夢に向かって一歩、一歩着実に進んでい

かねばならない事を再認識した。

翌日の分科会では「ふるさと案内人」に案内してもらいながら古川のまちづくりについて貴重な話を聞かせていただいた。

まず、古川の町並みの工夫について。

まちには古い建物、新しい建物が混在しているが、新しい建物の所有者でも建物の古い町並みに面した部分に、自分の出来る範囲で景観を壊さない工夫をしている。アルミサッシの格子でも、下見板風のサイディングでも、瓦2枚分を貼りつけただけの軒であっても全体として見ると違和感がなく溶け込んでいる。

次に特徴について。軒の腕木に「雲」と呼ばれる彫刻が施されている。これは古川の大工の誇りを示すもので、大工によりデザインが異なる。この「雲」は古川の町並みになくてはならないもので、誰もが「雲」にこだわり、格子がアルミサッシでも腕木の「雲」はしっかり彫られていた。さらに、自分の家を思い思いに飾ることで通りを華やかに演出したり、独自の景観賞を作ったりして「自分たちのまち」



格子に飾られた花

という意識の高さを感じることができ、誇りを持って暮らしている事が分かる。これは、祭りについても同じで、祭りの屋台は各町内会で維持管理され、少ないところは20軒で維持しているとのことであった。



独自の賞



勢ぞろいした屋台と車も通ることが出来る広場

この日は本来なら、春祭りに曳きまわされる屋台を町並みゼミ全国大会のためにお祭広場に勢ぞろいさせたり、ステージでは獅子舞いが演じられたりして、華やかな祭りを体験することが出来た。これも日頃の活動の賜物であり、皆が誇りをもって暮らしている証だと思う。一回りした後分科会討議の会場に移り、「町並みを作る祭り文化」に参加した。

<まちのスケッチ>

まちを散策して、古い建物がどのように活用されているかも見てみた。昔のままの姿で営業を続ける酒蔵や、NHK朝の連ドラで舞台となった和ろうそくの店がある一

方で、修復や改装さ

れて様々に活用されている建物も数多くみられる。中でも観光客向けの飲食店や雑貨店が特に多いが、このまちで暮らすために必要な店（八百屋、肉屋等）にもかなり活用されている。当然のことながら大きなスーパーやコンビニは無い。車で5分も行けばスーパーがあるが、普段はまちなかの店で十分なのだろう。そういえば、大聖寺もまちなかに普段の生活に困らない程度の店があった。普段誰もが暮らせるような店がなければ、保存や活用の歩みも遅いものとなる



ヨービーとカレーの店

少し歩いてみると、瀬羽町周辺と古川と趣が少し異なることに気がついた。それは、木口を白く塗られた腕木「雲」の彫刻だったり「袖壁」がない事などかも知れない。袖壁は和ろうそく店はもちろん、酒蔵にもな



和ろうそくの店

い。形は異なるが下がり雁木はあるし、下屋に起り（むくり）のある家もある。たったこれだけの事で町並みの雰囲気はかなり異なってみえる。

さらに歩くとあちこちに「↑無料駐車場」の看板があり、これ従って進むと、まちのはずれの駐車場に案内される。結局観光客がまちの中に入るために5から10分程度歩くことになり、観光バスなどはまちの中に入って来ない仕組みになっている。滑川の宿場町も歩いてまわれるまちになって欲しいと思う。

さて、飛騨古川は土蔵の側を水が流れ、灯籠の灯りが水面を照らすそんなイメージがある。滑川も水路が張り巡らされ、かつては灯籠流しも行われていたという。現在でも祭り提灯や子どもヤサコ（大行灯）の風習が残っており、これらの明かりが水面を照らす、そんな風情あるまちなみになるのではないかと思います。何といっても流れる水の音や明かりのゆらぎは人の心を癒してくれる。



最後に、飛騨古川の町は電柱が残ったままである。一般的に古い町並み＝無柱化というイメージがあるが、無理して無柱化しなくても雰囲気の良い町並みができると感じた。レトロな電柱があれば尚良い。

今回ゆっくり歩くことができたので、まちの様々な魅力を発見することができた。普段であれば通り過ぎてしまうところだが、町並み保存やまちづくりの活動報告を聴き、さらに地元の方にガイドをしてもら



レトロな洋風の食堂と電柱が残る通り

うことで、より身近にまちの歴史と文化と生活に触れることができたからだと思う。

こんな旅も悪くない、そう思うのは自分が年を取ったからなのだろうか。

滑川宿まちなみ保存と活用の会
事務局 廣橋 和親

「活動報告」

「滑川宿まちなみ保存と活用の会」が主催した活動

◆ 7月10日（日）「浴衣で夕涼み会」

浴衣の着付け教室のあと、七夕を飾り浴衣のファッションショーが開催されました。来場者は夏の和菓子を頂いたり、打ち水された戸前から庭を歩いたりする夕涼みを行いました。参加者は数名でしたが、浴衣を着た中学生の皆さんは大変感激している様子でした。



◆11月12日（土）「滑川宿ぶらり散歩」

～滑川の登録文化財みてあるき～

滑川宿まちなみ保存と活用の会では、会の紹介をかねたまち歩きマップ（パンフレット）を作成したので、これを使った「滑川宿ぶらり散歩」を企画、実施しました。

当日は天候にも恵まれ、13名の参加者は城戸会長の挨拶に始まり、約二時間に渡り散策しました。宿場



町の名残持つ会員以外
の家々も案内することで、さらに興味を持ってもらえたようです。次回は3月に開催予定です。

◆ 10月14日（金）「まちなみ談義」

（社）富山県建築士会 新川ブロックと共催で開催されたこの企画は、金沢湯涌江戸村村長・土屋敦夫氏による講演会「建築士とまちづくり」、十三夜の月愛でながら琵琶を聴く「琵琶の調べと後の月」、懇親会「まちなみ談義」の三部構成で開催されました。

琵琶は初めてという方ばかりでしたが、月明かりを連想させる明りの下、誰もが知っている「耳なし芳一」や「本能寺」が演じられると皆、幻想的な琵琶の音色に聴き入りました。

◆12月1日(木)「滑川宿まちなみ案内」発刊

会の活動の範囲を表すイラストマップと共に、会の趣意や会員の建物を紹介するパンフレットを作成しました。

5,000部印刷し、市内の各所設置したり、配布する予定です。



滑川のことやまちなみに興味のある方々にも差し上げますので、ご入用の方は事務局まで連絡下さい。

namerikawajuku@mail.goo.ne.jp

090-8265-6954 : 廣橋

◆12月9日(金)「瀬羽町演芸場」

瀬羽町演芸場は市内外、プロアマ、洋の東西問わず色々なジャンルの方に出演していただくとともに、宴やお茶会などの交流の場を設けることで、出演者と来場者、または来場者同士活動の輪広め、相互に繋がるきっかけを作るという企画です。

今回は第1回ということもあり、県内で活躍している三遊亭良楽さん、コンプレッサーさんを迎え、多くの方が落語と、トークマジックを楽しみました。



「滑川宿まちなみ保存と活用の会」が協力した活動

◆毎月第4土・日曜日「骨董ふりま」

4月から旧宮崎酒造で開催されている骨董市は12月で9回目の開催となります。継続的に開催されているので、



来場者も定着してきました。

かなりのお宝も出品されているらしいので、探してみして下さい。

◆9月24日、11月3・26日「まちなか元気市」



地元の生産者の皆さんが採れたての野菜、果物、米や花。手作り味噌、ジャム、らっきょう漬や健康茶などの加工品を瀬羽町に運んで来てくれます。

まちなかでは採れたて野菜や手作り味噌などを買う場所が殆どないので、多くの方が9時の開店を待ち切れず、8時半頃から並ばれます。

◆8月6日(土)・7日(日)

ベトナム・ランタンまつり in なめりかわ

昨年に続き今年もベトナム・ランタンまつりが開催されました。今回、滑川市はもちろん、ランタンまつりの本家であるベトナム・ホイアン市の後援を頂くことができたのは大変ありがたい事



でした。そして今年も多くの人と人のつながりが、暑くて熱い2日間のイベントとなって実を結びました。

今回から、滑川宿まちなみ保存と活用の会の会員や賛助会員の家を始め、地域の商店の軒先にもランタンが飾りつけられて、ちょっとだけ賑やかになりました。来年はベトナムのランタンに限らず、地元のまつり提灯など



も一緒に飾って、通りをランタンや提灯の明かりで彩る事ができればさらに風情のあるまつりとなることでしょう。

旧宮崎酒

造のトオリニワを舞台として行われたコンサートは、ベトナム人ボーカリストを始め、ダンバウ(一弦琴)、ダンチャイン(十七弦箏)、ギター、ベース、デジタルフォンなど総勢7名のバンドが出演しました。さらに有り難い事にはランタンまつりの曲作ってきてくれたことです。これを披露し、来場者と一緒に歌って大いに盛り上がりしました。

ISO 9001 : 2000 認証取得
ISO 14001 : 2004 認証取得

みんなで進めようリサイクル

(株) 金山産業

家屋解体工事 フリーダイヤル 0120-88-7530

事務所 〒936-0004 富山県滑川市笠木74-1 TEL (076) 475-7530 FAX (076) 475-9184
http://www.kanayama-s.co.jp E-mail: info@kanayama-s.co.jp